説経の女性像

――乙姫・照手姫を中心に――

山崎睦也

（一）

説経の特色の一つは、その表現の中心点に家族関係への意識が据えられていることである。説経の発想の場は基本的に家族の関係性から発し、またそこから逸脱しようとしないのが特徴的である。というよりも、説経は家族の内部における悲劇、家族の崩壊や離散を徹底して語ることによって一つの語り物として成り立っているとさえ思えるのである。

説経の中でも説経らしい語り物である「さんせう太夫」は、そうした説経の特質をよく表している。例えば、づし王らが都へ旅立つ「みかどにて安堵の御判を申し受け、奥州五十四郡の主とならう」との目的は、後半になってすっかり忘れられてしまい、別れた肉親への思いがそれに代わってしまう。また、その目的は社会的、政治的意識に基づいているようだが、づし王らの行動原理として、それほど機能しているようには思えないし、この語り物にとってはその目的の遂行よりも母や姉との別れを語る方が余程重要であるように見える。また、さんせう太夫や三郎は一見したところ抑圧的な権力者であるようにも思えるが、実は安寿・づし王の姉弟に苦を与える存在でしかなく、姉弟との間に葛藤と呼べるほどのものをうみ出したりしない。「安寿」という名が結末の部分で初めて現われ、それまでは一貫して「姉御様」と表現されていることが象徴的に示す如く、安寿は母なきあとのづし王の庇護者として立ち振舞い、「姉」としての立場をけっして崩さないのである。

以上はほんの一例にしかすぎないが、説経においては、家族以外の他者との社会的な関係は表現の中心を占めることはなく、家族の関係性の周辺に位置するものでしかないのである。説経に描かれた

女性を考察するにあたって、このような説経の特徴を考慮すると、家族内での立場のあり方によって考えを進めるのが一つの有効性をもつように思える。そこで説経に登場する数多くの女性の中では女性が女性としての立場を明確にうち出して描かれているものに、〈母〉として登場する場合と〈妻〉として登場する場合との二つの典型を取り出すことができる。普通に考えると、母としての立場は妻としての立場を含むものであろうが、例えば「苅萱」において加藤左衛門の御台所（即ち石童丸の母）が臨終の際に「夫の行方は聞かずとも一度会ひたや石童や恋し恋し」と語るのが象徴的に示すように、母として登場する女性は母と子の関係がその基盤であり、夫と妻あるいは男と女の関係を基盤として描かれる妻としての女性（無論それは子のない場合が多い）とは明確に区別される。

母として登場する女性における特色の一つは、その夫が不在だということである。例えば「苅萱」の加藤左衛門は突然出家し、「さんせう太夫」の岩木判官は筑紫へ流罪になり、「法蔵比丘」の太子は本国に帰国する。このような夫の不在性は、家族の中での母親の位置を重大なものにする。父なき後母は父に替わる存在であらねばならない。しかしながら、母は家族の中でむしろ現実的な諸力を持たない弱者であり、他に依拠する存在として表現されている。この矛盾が母を中心とした父なき家族の悲劇の根源である。母として登場した女性をめぐる主題とも言える子どもとの別れが、そこで演じられる。その子どもとの別離において、母はいかにも無力な存在である。「能がない職がない」として手足の筋を断たれ、目を泣きつぶして鳥追いをするづし王の母が象徴するように、母たる存在は自分達を襲った不幸に対して抵抗する術をもたず、ただ嘆き悲しむだけの存在である。また、彼女らを見舞った不幸は例外なく外側からやってくる。苅萱の御台所は高野山の女人禁制の掟に阻まれて孤独のまま病死し、づし王の母は人買いの山岡太夫に母子の間を引き裂かれ、「法蔵比丘」のあしゅく夫人も旅先きであえなく病死する。これらは彼女らが行動を起した結果というよりも、外側からの力によって引き起された悲劇である側面の方が大きいし、敢えて内的な面を考えるならば彼女らの無能性に原因があるようである。それに夫の不在も彼女らにとっては全く外からやってきた出来事に他ならなかった。先程も述べたように母たちはこれに対して反抗する力がなく、また積極的な行動を起すことはない。というよりも、表現の主眼は子との別れにおける母の嘆きそのものにあるように思える。母として登場する女性は、このように行動性よりも子との別離における悲嘆の表現に、弱者としての母の姿を語る本来的な特質を発揮しているのであり、そこに〈母〉としての女性像がみとめられるのである。

（二）

妻として登場する女性は、このような母としての女性とは別の位相で語られている。無論、妻として登場する女性に悲嘆の表現がないのではない。しかし、それは表現の主眼とはなっていない。そこには悲嘆性よりも、夫婦関係に固執する女性の姿が見出される。

「しんとく丸」の乙姫にそのような女性の典型が見られる。

(イ)病さまざま多けれど、目の見えぬこそ物憂けれ。目が見えねばこそ、かくまい恥をかくことよ。たとひ熊野の湯に入りて、病本復したればとて、この恥をいづくの浦にてすすぐべし。天王寺へもどり、人の食事を賜るとも、はつたと絶つて、干死にせん

(ロ)乙姫、この由きこしめし、「(略)それは自ら尋ねあつたは治定なり。さて自らも女房たちと一つになつて、笑うたりとおぼしめし、お恨みあらうよ悲しや」と、「さて自らは、夢にも我は知らぬなり」

(ハ)熊野を問うて参りしに、盲目のあさましや。御身の屋形と知らずして、施行を受けに参りてあれば、女房たちのお笑ひあつたを聞きしより、面目と思ひ、干死にせんと思へども、死なれぬ命のことなれば、巡り合うたよ恥づかしや。これよりもお帰りあれ（新潮日本古典集成『説経集』による。以下説経の引用本文は同書による。）

継母の呪詛のために業病をうけ、天王寺に捨てられたしんとく丸は、清水観音の告げにより袖乞いをし、知らずに陰山長者の館を訪れる。(イ)の文はしんとく丸が館の人々に正体を知られ恥辱感にさいなまれての口解き言である。(ロ)の文は、そのしんとく丸の来訪を知った乙姫の嘆きである。その後乙姫は行方不明のしんとく丸を捜しに出るために父母へ暇乞いをするのであるから、これがしんとく丸を尋ねる第一の動機を語ったことばになるわけである。したがって、このことばは表現の中で大きな比重を占めることばと見做される。ところが、(イ)の文と(ロ)の文とをよく読み比べてみると、(ロ)で語られた乙姫の認識には明らかな事実誤認のあることに気付く。しんとく丸は乙姫のいる館と知らずに、そこで斎料を乞うたのであり、乙姫を尋ねたのではない。また、(イ)の文ではしんとく丸は盲目故に受けた恥辱について異常なまでの絶望を感じ、自分の不幸を嘆くことに終始しているにすぎない。ここでしんとく丸は乙姫を恨むどころか、その存在にさえ思い至っていないのである。このしんとく丸と乙姫との間には認識というよりも存在性自体の明らかな段差があるように思える。もっとも、それについては異論の生じる余地がないではない。例えば(ハ)の文は天王寺で二人が再会した時のしんとく丸のこ

とばであるが、これからは乙姫への思いも微妙なニュアンスをもって受け取ることができるし、しんとく丸の意識のうちに乙姫の存在のあったことが汲み取れる。したがって、(ロ)のような乙姫のことばについて、乙姫は表現に隠されているしんとく丸の意識を読み取ったのであるとか、実はしんとく丸は乙姫のことを思っていたが、あまりの恥辱感のために我を忘れてしまったのであるとかの説明を加えることも不可能ではない。しかし説経の登場人物は終始一貫した性格や意識をもつとは限らず、むしろ場面の性格に応じてそれらを変化させることが多いのを考慮に入れなければならない。詳しくは後述するが、(イ)と(ハ)との微妙な相違は、しんとく丸が後に隠していた胸のうちを語ったというよりも、乙姫の行為によってもたらされた変化と考える。また、説経を読む場合に、表現に隠された登場人物の心理や意識を読み取ることはそれほど重要なことは思えない。ここで重要なのは表現によって示されている乙姫としんとく丸との差異性であると考える。

乙姫の認識は明らかな事実認識であるにもかかわらず、それは表現の次元では誤認であることを指摘されないまま更に進んで、乙姫はそれを行動へと転化する方向に動いている。乙姫はしんとく丸の行方を尋ねるために父母へ暇を乞うて次のように言うのである。

それ人の夫婦とて、八十・九十・百まで添うて死して別るるさへ、一旦嘆きあるものを、いはんやしんとく・自らは、花のおてなが露ほども、添ひなれ、なじみはなきものを。よき時は添はうず、あしき時は添ふまいの契約は申さず、あしき時添うてこそ、夫婦とは申さうに。ただ一時のお暇賜れ、父・母なう

合理的に見れば、乙姫がしんとく丸に対してこれほどまでに執着すべき理由はどこにもない。父の陰山長者が「文一つの契約で尋ねうとは何事ぞ」と言うことの方が正当な考え方であるように思える。このような醒めた眼も表現にあることは認めねばならないが、これが乙姫を止めるものとしては機能しない。乙姫は父母の許可を得て家を出、表現の流れは乙姫の方に流れてゆくのである。乙姫のしんとく丸を尋ねての道行文中で「あら夫恋しや」などの表現が何度も繰り返し用いられることとともに、「夫のゆき方更になし」と以前では乙姫の会話文の中でしか見られなかった、しんとく丸に対する「夫」という言い方が地の文にまで及んできていることに注意する必要がある。[1] これは乙姫の道行がしんとく丸への執着心の表現に他ならないことと同時に、それが地の文にまで浸透してきたことを示している。このような浸透はまさに乙姫の執着心と行動によって生じてきたものと言えよう。乙姫はこのようにしんとく丸との夫婦関係への固執を積極的に行動に転化することによって、それを地の文にまで浸透させてゆくのである。乙姫はその異常とも思えるほどの

執念を核に自分の力で自分としんとく丸との道を切り拓いてゆく女性として登場しているのである。

この乙姫とよく似た執着の姿が、「小栗判官」において青墓長者に売られた後の照手姫に見られる。この時の照手の言動には悉く小栗への思いがからんでいる。即ち、照手は「ただ夫の古里なりとも名に付けて、朝夕、さ呼ばれてに、夫に添ふ心をせう」と思って、長者に「常陸の者」との虚偽の名告りをしたのを初めとして、「今流れを立つるものならば、草葉の陰にござあるの、夫の小栗殿様の、さぞや無念におぼすらん」として遊女となることを断り、十六人分の水仕という苛酷な労働を自ら選択し、更に大事のある折は長者の身替りに立つという約束までして小栗のために土車を引くのである。乙姫とは違い照手の場合、夫の小栗は既に死んでおり再会の望みがないだけに、より執着と呼ぶにふさわしいものがある。

しかし、結果的に小栗は蘇生するものの、ここにおいて照手は小栗が死んで生き返らないものと信じており、その上蘇生・再会への希望もあまりもってはいない。[2] それから考えると照手は小栗自身に執着を示すというよりも、小栗との関係性そのものに固執しているように思える。先の引用からも、小栗の妻としての位相を頑迷に崩すまいとしている照手の姿が浮かびあがってくるのである。

土の車をたれもただ引くとは思はねど、善行車のことなれば、
美濃の国青墓の宿よろづ屋の、君の長殿の門となり、なにたる
因果の御縁やら、車が三日すたるなり

餓鬼のようになった小栗を乗せる「善行車」は青墓長者の門に止まる。これは単なる偶然ではなく、「因果の御縁」すなわち小栗と照手の関係性、そしてそれに対する照手の執心の深さによって必然化される。

ところで、この善行車を引く照手の「巫女性」ということが指摘されている。[3] 確かに基層の問題として照手のもっている「巫女性」は否定することはできない。だが、それをあまり強調しすぎると、照手が巫女そのものとして振舞い、小栗の蘇生を目的として土車を引くのであるかのような錯覚が与えられることになる。表層の問題として、照手は自分の引く善行車の主が当の小栗判官その人であることすら知らないし、小栗判官の蘇生をそれほど切実に願うこともないのである。この点を見逃すと表現された照手の本来的な姿を見失うことになるのではなかろうか。

なにたる因果の御縁やら、蓬萊の山のお座敷で、夫の小栗に離れたも、この餓鬼阿弥と別るるも、いづれ思ひは同じもの

照手が醜い餓鬼阿弥の中に小栗を見出すのは、小栗との夫婦関係に執着を持ちつづけているからこそであり、車を引いての道行が他ならぬ照手の執心そのものの表現であることを意味している。例え

ばこの物語の結句で照手が「契り結ぶの神」と斎われたとしてあるが、「契り結ぶの神」とは恋愛に関する神であり、それは照手が物語の中で夫婦関係にあくまでも執着し、それを成就する者としてのあり方が第一義的であったことの結果ではなかったか。それに関して高田衛氏が「小栗・照手の関係が、正八幡とその妻（カミに仕える巫女的存在）という意味と、荒人神（男神）とその従属神としての愛の神（女神）という意味ととの二重性において論理化される種類の「対」の関係であったと考えるのは、こじつけめくであろうか」[④]と、いささかひかえめながら御考えを示されたのは、鋭い指摘といわねばならない。照手は表現の世界で小栗死したる後もなお偏執的に小栗の〈妻〉としての位相を保ちつづけ、〈夫婦〉としての二人の関係性を一身に担いつづける女性なのである。このような照手の物語中の位相が、小栗の蘇生と照手の存在とを関連づけるのであり、その逆ではない。物語の基層は表現を媒介にして初めて浮かび上がってくるものなのである。つまり、照手の〈巫女的存在性〉という基層の問題は照手が小栗との関係性を担いつづけることによって表層の世界へと浮かび上がってくるのである。

このように乙姫や照手はあくまでも夫婦関係に執着し、それを行動に転化していく者としての女性像が与えられているのである。

① 天王寺での再会の後には、「夫婦打ち連れ、都を指してお上りある」、清水寺での蘇生の後には、「夫婦打ち連れ、御前にお参りあり」という表現があらわれる。

② 照手が餓鬼阿弥を見ての口説きごとの「夫の小栗殿様の、あのやうな姿をなされてなりともよ、浮世にござあるものならば、かほど自らが辛苦を申すとも、辛苦とは思ふまいものを」は微妙な含みを持っているようにも思えるが、やはり照手は小栗の蘇生を仮定の上でしか考えておらず、それを信じたり切実に希望したりはしていない。

③ 岩崎武夫氏『さんせう太夫考』など。

④ 「照手姫私考―鬼鹿毛とその騎士・第三部―」（『日本文学』昭和47・9）

（三）

乙姫や照手姫のこのような夫婦関係への執着ぶりに対して、男性の方はむしろ無自覚で無関心であるように見える。もの言えぬ餓鬼阿弥の姿で登場する小栗は、そうした男性の姿を象徴しているといえよう。彼らは無力な存在であるばかりでなく、回復に対する希求すら持たない存在であり、女性が執着心に導かれるようにして行動性を発揮するのに対して、消極的で自ら行動を起そうとはしない存在である。例えばしんとく丸は絶望にうちひしがれるばかりで、せっかく再会することのできた乙姫を拒もうとさえするのである。先述した乙姫としんとく丸の差異性は、第一にはこのように夫婦関係へあくまで執着する者と関心を払わない者との差異性であり、また

行動性を持つ者と持たない者との差異性である。女性はそうした男性に対してまさに孤軍奮闘の形で、夫婦としての関係性を一人で担い、それによって男性との差異を埋めていく。後に行われる男性との夫婦関係の実質的な成立は、そうした女性の活躍なしには不可能なものとして位置しているのである。

「さんせう太夫」における安寿とづし王の関係は姉と弟という関係であるが、かような男女関係に近いものを持っている。さんせう太夫のもとでは、常に安寿はづし王の先に立ち、づし王を庇護し導く位置にいる。安寿はづし王へ二度にわたって逃亡を指示し、逃亡の具体的な方法を詳細に教え込んだりもするのである。これに対してづし王はあまりにも消極的で悲観的である。づし王は二度の姉の指示を二度とも拒み、姉の思いきった行動に出会って始めて逃亡を承諾する。安寿は父母を失った後における弟づし王の唯一の庇護者であり、その点は考慮に入れなければならないが、上述したような安寿とづし王の対照性は乙姫・しんとく丸などの男女の関係と非常にアナロジカルなものとして我々の眼に映り、また「さんせう太夫」では安寿とづし王の対話がよく描かれているだけに、その対照性をより鮮明にしているように思える。安寿はその先導性と積極性において、執拗にづし王を説得し自らの意図するところへ引き入れてゆく。従来、安寿はその犠牲的な拷問死だけが問題にされてきたような印象があるが、表現の世界における安寿の存在の本質性は、むしろづし王に対する先導性の方にこそあるように思えるのである。なぜならづし王に変質をもたらしたものは、安寿の積極的な行為であったと思われるからである。

乙姫や照手の場合も、彼女らが意図するしないにかかわらず、その積極的な行動は、夫婦関係の成立と連関すべきことがらである。「しんとく丸」や「小栗判官」について論じられる時も、〈蘇生〉が常に中心的な問題とされてきたような感がある。しかし、これらの作品における女性の活躍のしかたを検討してみると、必らずしも全てが蘇生に向って動いているとは言いきれないもの見出す。乙姫や照手は、その先の夫婦関係の成立ということへの志向性の方が強いように思える。無論、蘇生ということはそのための必要かつ重大な出来事であり、等閑視することはできないであろうが、作品の大きな結節点の一つとして夫婦関係の成立ということにまさるとは思えない。作品全体を女性からの視点でのみ見ることができないのは当然であるとしても、かかる女性の行動の作品内での位置の重要性からすると、乙姫や照手の志向性とその帰結点の連関はもっと重要視されてよいと思われる。

乙姫や照手の執着性や行動性は、最初に述べたような母として登場する女性にはない。母の立場にある者は突然外側から訪れた不幸

に対して積極的に行動に出るよりも、それに対して無力である自分の状態や不幸への悲嘆を繰り返すばかりであり、むしろそうした悲嘆の表現自体に特色があったように思える。無論、それはそれで一つの場面を形成するものであり、悲嘆の表現そのものの価値を認めるに吝かではないが、問題は母としての女性が他の人々との関係を変える方向に動こうとはせず、内向的に嘆きを吐露するのみにとどまっていることであり、その意味では彼女らは作品の中で能動的な役割をはたす存在たりえないのである。それに対して、妻として登場する女性においては男性への執着心の深さが行動性へと転化され、しかもそれは神仏によるものでなく、彼女自身の意志の発現であること、また彼女らの行動が、夫婦関係成立へ関心をもたず、回復への希求すらもたない男性との関係性を変革する力となりえていること、以上のような点で彼女らは作品の中で能動的な存在として母たる女性とは別の位相を獲得しているといえる。

しかし、そのような彼女らの能動性が作品全体において充分に人間的な契機をもっているかと言えば、そうではない。例えば乙姫や照手は恋文のやりとりの場面では極めて受身的な存在であり、後にかようにまで執着心をもって登場してくるのが、突然の変身のようにさえ思えるのである。勿論「しんとく丸」や「小栗判官」における大和言葉による恋文の授受の場面は類型性の中で描かれた場面であり、そのため乙姫や照手が類型性の影響をうけていることは考慮すべきであろう。だが、ここで問題にしたいのは、彼女らの行動の核とも言うべき執着心の出所がそのような場面にしかないことであり、そこから発展的に描かれたものとしては描かれていないことである。

それはむしろ通常考えられる〈展開〉とは別の力によって吊り上げられて顕現しているように思われる。「小栗判官」での小栗と照手の深い関係性は流人と契りを結ぶという関係の持ち方自体からもたらされたのではないかということが、他の類似の説話の存在から考えられる。例えば「曽我物語」など[1]に記された伊豆における頼朝流人説話には、流人頼朝と契った伊東の三の姫の悲劇的な話が描かれている。これは父の知らぬうちに流人と契りをこめ、後にそれが父に発覚して非常な怒りをかい、暴力的に仲を引き裂かれるなどの点で「小栗判官」と共通のモチーフをもったものである。この他にも部分的に少しづつ相違点があるものの、ほぼ類似したモチーフをもったものに、「義経記」における鬼一法眼説話、室町時代物語の「あみだ御本地物語」（説経では「法蔵比丘」）「浄瑠璃物語」などがある。これらは「世に无シ源氏[2]」と言われた頼朝と同様に世に入れられぬ者と契ったための悲劇であった。中でも鬼一法眼の娘が「父の心を知りたれば、人の最後も今を限りなり。これを知らせんとす

れば、父に不孝の子なり。知らせじと思へば、契り置きつる言の葉、皆偽となりはてて、夫妻の恨、後の世まで残るべき。つくゞ〳〵思ひつゞくるに、親子は一世、男は二世の契りなり。とても人に別れて、片時も世に永らへてあらばこそ、憂きも辛きも忍ばれめ。親の命を思ひ棄てて、斯くと知らせ奉る」[3]と非常な葛藤をしいられるのが代表するように、父親を裏切りつつ自分の身をも滅ぼしかねないものであった。照手も同じく「今当代の世の中は、親が子をたばかれば、子はまた親に盾をつく」と父親を裏切らざるをえないような異常な、またそれ故に深い関係に陥いってしまったことを嘆いている。照手が小栗の死後に以前にもまして執着を深めるという異様な関係のもち方をする背後には、このような説話との関連があり、その説話的な力によって必然化されていると考えざるをえない。[4]

「しんとく丸」では、しんとく丸は流人的人物ではなく右のようなモチーフはないが、大和言葉による恋文の授受という「小栗判官」や「浄瑠璃物語」と共通の場面があり、ここに深い恋愛関係を成立させる一つの要素があるように思える。また、「しんとく丸」は物語全体の流れの中に〈夫婦〉の崩壊と新生というモチーフが含まれているのではなかろうか。即ち物語の冒頭の清水観音の前での信吉長者夫婦の申子と結末部分における同じ清水観音の前でのしんとく丸夫婦の誕生との呼応性が象徴的に物語っているように、作品全体に夫婦を核とする長者（一族）の崩壊と新生という主題のようなものの存在があるのではなかろうか。乙姫の執着心は乙姫自身の動きというよりも、そうした全体の流れのうちに生じてきていると思えるのである。

このように乙姫・照手いずれの場合も、彼女らの行動や精神などの中に夫への執着へと至る必然性は見出し難い。それは別の構造によって必然化されてきたものである。表現の中において乙姫や照手に全体的な統一的イメージのようなものを感じられず、またその恋愛に人間的なものをあまり感じないのは、そのためであろう。

しかし、言うまでもなく「恋愛関係」そのもの、「執着心」そのものは極めて人間的なことがらである。にもかかわらず乙姫や照手のそれに人間性をあまり感じられないのは、上述したことばかりでなく、彼女らの執着心が行動によって表現されるにとどまっており、したがって行動が心情の表現という次元を幾らも脱しておらず、それによって新たな行動が産み出されるようにはなっていないことによると思われる。この乙姫や照手に代表されるように、説経においては、確かに自分の情念を持ちつつ、それを行動へと積極的に転化し、またそれによって自己の情念を実現していく女性の姿を見出すことができる。しかし、それは物語の中で充分に必然化されたものとはなっておらず、かつ情念の発現を行動によって表現するという

次元にとどまってしまっている。無論、それには時代的・ジャンル的な限界もあろうし、説経は元来そうしたものとは別のものの表現であったろうから、それをもって作品全体の評価に直結することはできない。しかし、以上で述べてきたような説経の女性像を見ると、近世の文芸で描かれた女性像、例えば近松が描いたそれなどとは、なお大きな懸隔のあるとの印象を否むことはできない。

① 他に「源平闘諍録」、延慶本「平家物語」、「源平盛衰記」などがこの説話をのせている。

② 妙本寺本『曽我物語』（角川書店）より引用。

③ 『義経記』（岩波日本古典文学大系）より引用。

④ 臼井甚五郎氏は「義経譚の背景」（『太平記・曽我物語・義経記』日本古典鑑賞講座第十二巻）において鬼一法眼説話と小栗照手譚との類似を指摘しておられる。